

保育者養成における死生観構築教育の必要性に関する研究

山 本 詩 織

A Study on the Educational Practice for the Purpose of the Outlook on the Verge of
Death Construction among training courses for early childhood educators

Shiori Yamamoto

豊岡短期大学 論集

第 14 号 別 冊

平成 30 年 2 月 28 日 発 行

保育者養成における死生観構築教育の必要性に関する研究

A Study on the Educational Practice for the Purpose of the
Outlook on the Verge of Death Construction among training
courses for early childhood educators

山 本 詩 織

Shiori Yamamoto

1 問題の所在

本稿は、保育者養成のために実施される教育実践において死生観構築に焦点を当て、考察するものである。2017年に告示された新幼稚園教育要領では、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」として自然との関わり・生命尊重が明示された。これは教育基本法に掲げられた教育の目標に一層沿った形と考えることが可能であろう。道徳が教科化された小学校教育とのより滑らかな連携を考慮すると、今後幼児教育において生命の取り扱いが重視されると推測できる。このような現状の中、幼児教育を担う保育者自身が生命について深く省察する、つまり死生観を構築する必要があると筆者は考える。

死生観とは『臨床死生学事典』によると「生きることの意味と生の延長線上にある死について、どのようにとらえるかということについての個人の考え方」を指している¹⁾。この定義から考えると、死生観とは変容していく人生の中で日々死や生を見つめそのあり方を自分自身に問いかける中で構築されていくものである。

しかし現在、保育者となるべく養成機関に在籍するであろう青年期には「死」の捉え方に問題が存在している。富松・稲谷の調査によると青年期においては「死」について考える機会が少なく、青年期にとって「死」は遠く未知の存在と捉えているという現状が明らかにされた²⁾。また、柿田・原・竹内は調査の結果、青年期における大学生は「死」を意識することが少ないことを指摘し、その結果死を現実的に捉えることが困難な状況にあると述べている³⁾。この状況の原因は青年期における死生観構築の未熟さにあるのではないだろうか⁴⁾。死生観構築のために必要なプロセスについて、筆者は以下の3点を挙げる。1点目は青年期における「自己の死」に対して自覚し、理解することである。これに付随して、「死」という現象そのものを意識する機会を持つことを2点目とする。「自己の死」について、時間的にも距離的にも遠い存在であると楽観視せずに、深く考察し自己と向き合う機会が必要である。3点目は「死」という現象による喪失への理解である。「死」によって剥奪されてしま

うものについて予測をすることによって、自己が人生において何を心得、他者との関係性の中でどのように生きているのか、つまり生き様を理解することに繋がる。

本稿においては死生観構築に必要となるこれらの3つのプロセス（以下上から順にプロセス1、プロセス2、プロセス3と表記する）すべてが現状において十分に果たされていないと仮説を立てた。この仮説に基づき、筆者は日本にデス・エデュケーションを普及した第一人者であるA.デーケンの実践を基に、死生観構築を目的として専門学校生を対象にデス・エデュケーションを実施した。本稿ではこの実践を分析し、筆者が立てた仮説と分析結果を比較しながら保育士養成課程の学生における「死」への意識の現状や死生観構築教育の必要性を明らかにすることを目的としている。²

まず保育系専門学校A(以下A専門学校と表記する)におけるデス・エデュケーション実践について報告する。実践において学習者には自由記述の調査を実施した。その記述内容をKH-coderを使用⁴⁾し語句抽出することで分析し、上述した「死」への意識の現状や問題点を中心に考察していく。

2 実践概要と調査項目

本実践はA専門学校において「医療保育特講」という独自科目をデス・エデュケーション実践として開講・実施したものである。本稿におけるデス・エデュケーションは学習者が「死」について学習する上で自己や他者の死について考察し、いつか迎えるであろう「死」するまでの人生の意義を探索し、自己実現を果たすことを目的とした教育であると定義する⁵⁾。「医療保育特講」は発展的な学習としてカリキュラム上に位置付けられ開講されている。本実践の対象者は保育系専門学校3年次生で「医療保育特講」を受講している男女34名(男性12名、女性22名)である。本実践は表1の通り授業内容を計画し、実施した。計画に際して、A.デーケンによる上智大学、聖心女子大学、および上智大学コミュニティ・カレッジ(夜間の市民大学講座)における「死の哲学」の講義での実践⁶⁾を参考とした。

表1. 「医療保育特講」授業内容とねらい

回	授業内容	ねらい
1	オリエンテーション、事前アンケート記入	事前説明、予備調査
2	「死」ってどんなイメージ?	「死」に対する意識への自覚、多様な「死」のイメージの共有
3	「死」の種類	「死」に関する基本的知識の獲得
4	「自分自身の死」を考えてみよう①余命6か月と宣告されたら	自己や他者の「死」と向き合う
5	「自分自身の死」を考えてみよう②何を恐れるのか	「死」に対する自身の感情の自覚、「死」への恐怖に関する知識の獲得
6	「自分自身の死」を考えてみよう③何を失ってしまうのか	喪失体験の疑似体験、「生」への自覚
7	「自分自身の死」を考えてみよう④別れの手紙を書いてみよう	自己の「死」と向き合う
8	いのちについてどう思う?(妊娠、出産についてのディスカッション)	出生に関する基本的知識の獲得、他者との価値観の共有、自己の「生」への自覚
9	子どもに「死」をどう教える?①	発達段階における「死」の理解度について知識を獲得、援助者としての視点の獲得
10	子どもに「死」をどう教える?②	「死」と「生」に関する教育方法の考察
11	まとめ、感想記入	自己の省察

2-1 対象者と期間

保育系専門学校 3 年次生で「医療保育特講」を受講している男女 34 名(男性 12 名、女性 22 名)。

2-2 期間

2015 年 9 月から 2016 年 1 月にかけて授業時間内に実施した。

2-3 方法

毎授業開始時に質問紙を配布し、授業時間中に回答してもらい、授業終了時回収した。なお、質問紙配布毎に回答拒否ができることを対象者に明示した。

2-4 調査項目

本稿において分析する調査項目は以下の 3 点である。

1 点目は対象者の背景である。第 1 回目授業時に、ペット等の死別体験の有無とその時期、身内や近い人の死別体験の有無とその時期、死のイメージについて記述してもらった。この調査項目により、対象者の背景を把握することが可能である。

2 点目は余命 6 か月と宣告された後の行動についてである。第 4 回目授業時に、もし自分が余命 6 か月であると宣告された場合、どのように行動するのかについて理由も含めて考え記述してもらった。この調査項目により、対象者がどの程度明確な「自己の死」をイメージしているのか明らかにする。

3 点目は死ぬ恐怖である。第 5 回目授業時に、「自己の死」に際して何に恐怖を抱くと思うか考え記述してもらった。複数恐怖を抱く場合、そのすべてを回答してもらっている。この調査項目から対象者の死に対する恐怖をリストアップする。

2-5 分析方法

本稿においては樋口耕一が作製・公開している KH Coder を用いて調査項目のテキストを読み込み自動的に語を抽出する。このシステムを使用することによって客観性を確保した分析が可能となる。語を抽出した中から頻出語を確認した上で、それらの語句が文脈の中でどのような共起関係にあるのか明らかにすべく、KH Coder の「共起ネットワーク」コマンドを使用し、出現パターンの似ている語を線で結んだネットワークを描く。この図において、強い共起関係を示すものほど語を結ぶ線が太くなり、出現数の多い語ほど大きい円で描画される。そこから記述の特徴を分析していく。なお、分析に際しては KH Coder の KWIC コンコーダンスのコマンドを使用し、それぞれの語句が文脈でどのように使用されているのか確認している。

2-6 倫理的配慮

学生には授業開始日のオリエンテーションにて、授業と研究の趣旨を説明し、協力を求めた。質問紙にて回答した情報は個人が特定されないこと、回答は強制ではないこと、学業成績とは無関係であること、研究成果として学会での発表や誌上投稿があることを説明し、了承を得た。

3 結果と分析、考察

3-1 回収率

前提として、本稿においては欠損データー（回答拒否・未記入者）も死に対して思索することの拒否がその理由として考えられるため、有効回答者に含んでいる。さらに回答は全て複数回答を全て含んだものを分析している。

- 1) 対象者の背景についての事前アンケートは実習に関する欠席等により 26 名分（76%）回収した。
- 2) 余命 6 か月と宣告された後の行動については 33 名分（97%）回収した。
- 3) 死ぬ恐怖については 32 名分（94%）回収した。

3-2 対象者の背景

26 名分の事前アンケートでは、ペット等の人間以外との死別体験について、21 名（81%）が経験していると回答した。身内や近い人との死別体験については、24 名（92%）が経験していると回答した。その内、どちらも経験していると答えた割合は 19 名（73%）に上り、全く経験がないと回答した者はいなかった。体験の時期について問う³と、人間以外との死別体験は幼児期から小学生時に回答が集中した。対して身内や近い人との死別体験は専門学生時に経験したという回答が多く、ごく最近経験したという回答もあった。対象者が年齢を重ねると同時に周囲の人間も同様に年齢を重ねている。祖父母等の年齢も高齢となっていることが予想されるため、年齢を重ねる度に死別体験をする機会が増加する可能性も増えるのではないだろうか。

次に、「あなたは「死」について、どのようなイメージを持っていますか？」という問いに対して対象者から得られた自由記述データを分析した。分析の手順として、まずは KH Coder を用いて前処理を実行し、文章の単純集計を行った。その結果、48 の段落、79 の文が確認された。この中で分析対象ファイルに含まれているすべての語の延べ数である総抽出語数は 234、何種類の語が含まれていたのかを示す数である異なり語数は 118 であった。さらに助詞や助動詞など、どのような文章にでも出現する一般的な語が除外され、分析に使用される語としては 122 語が抽出された。次に KH Coder の「共起ネットワーク」コマンドを使用して共起の程度が強い語を線で結びネットワークを描いたものを図 1 として示す。「怖い」という語を中心にまとまりが 1 つ、そして右下に小さなまとまりが 1 つ確認できる。ここから「死のイメージ」について 5 つの特徴的なパターンを見出すことができる。

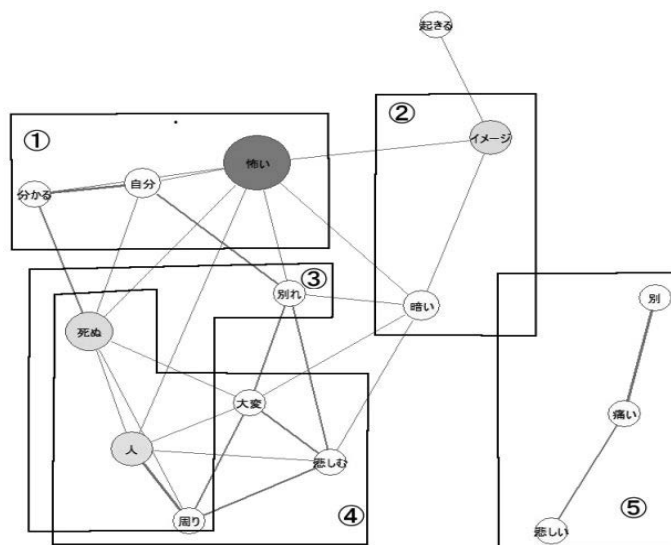
まず 1 点目として「死」が未知の現象であることに起因した恐怖を想起するというパターンである。これは図 1 における①のまとまりが表している。対象者の記述を振り返ると、「死んだことが分かるのか分からないから怖い」や「自分でいられない、自分を感じられないから怖い」等の記述がなされている。「自己の死」は人生に一度きり経験するものであり、その経験談を他者から伝え聞くことは不可能である。そのため想像の範疇を超えることのない未知の現象として恐怖の対象となっていることが分析できる。

2 点目としては、漠然としたマイナスのイメージを想起するパターンである。これは図 1 における

②のまとまりが表している。対象者の記述を振り返ると、「怖いイメージ」や「暗い冷たいイメージ」等の記述がなされている。これは1点目とは違い、「死」という現象や言葉、概念そのものをマイナスのイメージと関連付けていると考えられる。

3点目としては、他者との別れを想起するというパターンである。これは図1の③が表している。対象者の記述を振り返ると、「もうみんなとはお別れなんだ」や「別れ」という記述がなされている。この特徴は、青年期において「死」は他者との関係性の中で想起されていることを反映している。これは自己の生を他者との関係性の中で感じていることの逆説的な説明となるのではないかと。

図1. 「死のイメージ」についての自由記述における共起ネットワーク



4点目は他者への影響に注目しているというパターンである。これは図1の④のまとまりが表している。他者との繋がりに注目している点では3点目と類似性が見られるが、こちらは「自己の死」による他者への影響について言及した記述である。「死ぬ人よりもその周りの人が大変」や「周りや近くにいる人が悲しむ」等、負の影響に注目した記述がなされている。この特徴から学生にとって他者との関係性の重要度の高さがうかがえる。このイメージは対象者が事前に死別体験をした際に感じた感情が影響を与えている可能性がある。他者の「死」によって自己が受けた影響を思い出し、「自己の死」の場合も同様の状況になると予想し、発生したイメージだと考えられる。

5点目としては図1の⑤が示す、苦痛に関するイメージを想起するパターンである。漠然とした肉体的痛みを想起させる「痛い」という記述や漠然とした「痛みや苦しみ」という記述がなされている。これは死が自己の意思とは反して発生してしまう現象だと強く意識していると解釈することができ

る。

3-3 「自己の死」に対する意識

次に「もし自分が余命 6 か月であると宣告された場合、どのように行動するのか」という問いに対して対象者から得られた自由記述データを分析した。先の分析と同様に、まずは KH Coder を用いて前処理を実行し、文章の単純集計を行った。その結果、126 の段落、202 の文が確認された。この中で分析対象ファイルに含まれているすべての語の延べ数である総抽出語数は 1847、異なり語数は 415 であった。さらに助詞や助動詞など、どのような文章にでも出現する一般的な語が除外され、分析に使用される語としては 814 語が抽出された。

表 2. 「余命宣告をされた場合の行動」についての自由記述をコーディングした場合の頻出語

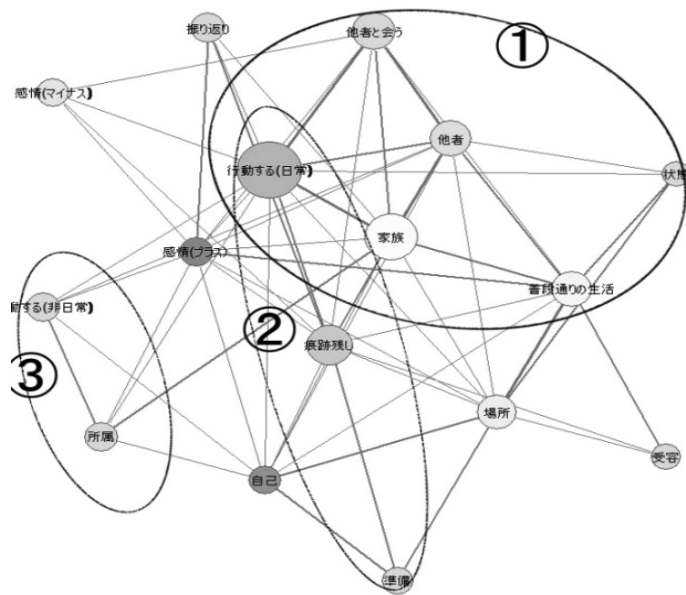
コーディング名	語	頻度
行動する(日常)	行く、遊ぶ、食べる、飲む、見る、話す、帰る、言える、作る、実行、書ける、買う、描く、料理	56
家族	親戚、母、兄、祖母、祖父、妹、姉、弟、父、家族、親、子ども、妻	39
痕跡残し	手紙、日記、ビデオメッセージ、書く、思い出、写真、ムービー、残す	28
他者と会う	会う、言ってまわる、伝える、挨拶、感謝、関係、恩返し	25
他者	友だち、友達、友人、大切な人、親しい人、縁があった人、世話になった人、知り合った人、恋人、かかわった人、好きな人、アーティスト、バンド、会えなかった人、久しぶりの友だち	22
普段通りの生活	いつも通り、普段通り、普段、いつも、普通通り、普通、過ごす、維持	20
場所	ディズニー、TDL、USJ、温泉、家、部屋、国内、場所、海外、外国	19
振り返り	振り返る、思い出す、考える	11
行動する(非日常)	旅行する、遠出、挑戦、やりたいこと、ライブ、好きなこと、使う、ヒッチハイク、辞める	10
感情(プラス)	楽しい、楽しむ、落ち着く	10
所属	学校、アルバイト、バイト、仕事	10
感情(マイナス)	後悔、無理、悔い、恐れる、苦しい、嫌	8
自己	自分	8
準備	エンディングノート、遺言書、掃除、遺影、整理、遺書	7
受容	受け入れる、受け止める、運命、迎える	5
状態	働ける、動く	3
その他	その他分類不可能な語	48

出現回数が 1 回のみ語が多く、KWIC コンコーダンスコマンドにて文脈を確認したところ、「友人」と「友だち」等の同じ意味合いで使用されている語が多数存在した。より共起関係を探るために、KJ 法によりコーディングをした結果、抽出語は表 2 のように 17 に分類できた。これを基に KH Coder の「共起ネットワーク」コマンドを使用して共起の程度が強い語を線で結びネットワークを描いたものを図 2 として示す。この図 2 から、余命宣告をされた場合に対する行動パターンを 3 つに分類することができる。

まず 1 点目として家族や他者と日常的な行動を共にするというパターンである。これは図 2 における①の部分で確認できる。「家族や友人と過ごす」や「家族、恋人と思いっきり笑う」、「母と祖母の

「手料理を毎日食べる」等の記述がなされている。この行動の中でもさらに2点特徴を見出すことが可能である。1つはその日常に普遍性を求めているという点である。記述には「友達とは、いつものように楽しく過ごしたいと思う」というようにあり、家族や他者との関係性に変化を求めず、普遍的な状況を過ごしたいという希望が読み取れる。また、ここから死に対する受容に関しての記述と共起関係が認められている。もう1つは他者に会うという行動を特に求めている点である。「縁があった人たちに会に行く」や「大切な人、感謝してる人たちに会に行く」等の記述が確認できた。

図2. 「余命宣告をされた場合の行動」についての自由記述をコーディングした場合の共起ネットワーク



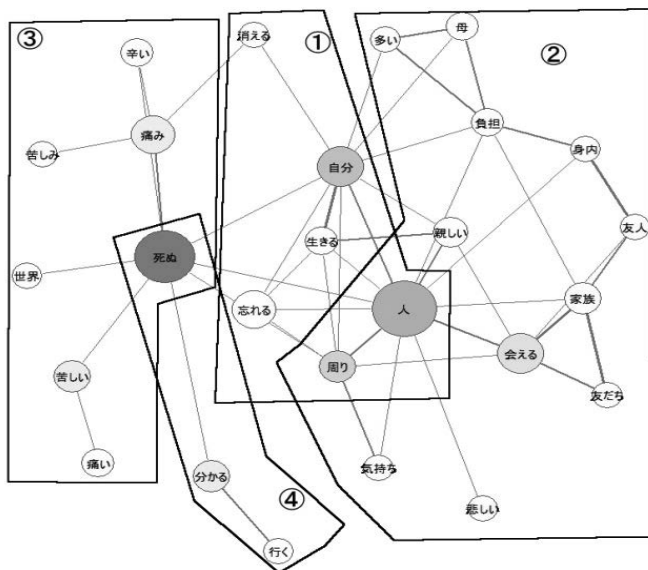
学生は日常と何ら変わらない普遍的な生活を望んでいる。これは日常から「死」を切り離して捉えていることを反映しているのではないかと推測できる。「死」を非日常的な存在と捉えているからこそ、より日常と何ら変わらない普遍的な生活を希求してしまうと推測できる。「生」を希望することは人間の生存本能から当然の思考形態である。しかし「死」は非日常に存在するのではなく日常に存在している。この部分において「死」に対する理解が不足しているといえよう。また、強く日常的な生活を希求しすぎてしまう場合、「死」によって引き起こされる喪失体験により強いショックを受けてしまう可能性を指摘できる。2点目は何かしら自分の痕跡を残すために行動をするというパターンである。図2における②に確認できる。記述においては「手紙を書きます。何かを残したいです。」や「家族ともできるだけ多くの思い出作りをする」、「いろんな人とたくさん写真を撮る」等の記述があり、痕跡を

残す形は手紙や映像、写真、日記という具体的な形が表現されていた。この痕跡を残すための行動は死に対する準備活動との共起が見られる。「遺影の写真を撮る」や「大切な人に遺書を書く」という記述が存在しており、自己の痕跡を残すことは他者に対しての死への準備活動も伴っていることが分かる。3点目は現在の所属を抜けるというパターンである。図2における③に確認できる。記述を振り返ると「仕事をしていたら辞めて、学校に行っていたら学校も辞める、アルバイトも辞める。」や「仕事を辞める」という記述が確認できた。この記述に共起関係があるものとして非日常的な行動や家族とのかかわりがあった。3点目のこのパターンは脱社会を意味しているのではないだろうか。

3-4 死ぬ恐怖と喪失に対する理解

最後に「自分が「死ぬ」場合、何が怖いですか？」という問いに対して対象者から得られた自由記述データを分析した。先の分析と同様に、まずは KH Coder を用いて前処理を実行し、文章の単純集計を行った。その結果、90 の段落、195 の文が確認された。この中で分析対象ファイルに含まれているすべての語の延べ数である総抽出語数は 553、異なり語数は 147 であった。さらに助詞や助動詞など、どのような文章にでも出現する一般的な語が除外され、分析に使用される語としては 280 語が抽出された。次に KH Coder の「共起ネットワーク」コマンドを使用して共起の程度が強い語を線で結びネットワークを描いたものを図として示す。この図3からは死に対する恐怖のイメージにおける4つの特徴を見出すことが可能である。

図3. 「死ぬ恐怖」についての自由記述における共起ネットワーク



まず1点目として自己の存在が消滅することに対する恐怖が想起されている点である。これは図3の①に表れており、さらに2つに分類することができた。1つ目は自己として存続できないことに対

する恐怖である。対象者の記述を振り返ると、「自分の存在がなくなる」や「自分としてもう一度生きられない」等の記述が確認できる。2つ目は自己の存在を忘却されることに対する恐怖である。これに関しては「自分が世間の人に忘れられてしまうこと」や、漠然と「忘れられること」等の記述があった。この忘却に対する恐怖は他者の存在を前提として考えているからこそ生じるものである。つまりこの2つ目の恐怖は他者との関係性と自己の存在の共起関係から発生していると推測できる。他者との関係性という視点から、2点目として他者との別れに対する恐怖を想起するという特徴もある。これは図3の②において全体的に示されている。「家族に会えない」や「家族、友人などに会えない」等の記述があった。この特徴からは、やはり前述してきたように他者との関係性について対象者が重要視していることを読み取ることができる。

3点目としては苦痛に対する恐怖が特徴として挙げられる。これは図3の③に示されている。振り返ると「死ぬ前の痛みや辛さ」や「痛みのある死に方」、「苦しい死に方」等の記述が確認できる。この記述における「痛み」や「苦しみ」は肉体的なものを想像することができる。しかし、肉体的な苦痛については想像することができていたとしても、死が迫った中でのうつ状態や怒り、孤独感を味わう等の精神的な苦痛や仕事上の問題や経済的な問題を抱える等の社会的な苦痛について明確に言及する記述は見られなかった。「死」を控えている場合、肉体的な苦痛のみならず、上記のような精神的な苦痛や社会的な苦痛を感じることも予測できる。学生にとってこの精神的な苦痛や社会的な苦痛は自覚的にイメージすることが困難なものであると解釈することができよう。

最後に4点目として死の未知さによる恐怖が挙げられる。これは図3の④に存在を確認できる。記述を振り返ると、「どうなるか分からないからこわい」や「どこに行くのか分からない」等の記述がある。

4 考察

4-1 対象者の背景と死に対するイメージから見える対象者の現状

分析を概観すると「死」について「負」のイメージのみが強調されて抽出されたと言えよう。この状況が進行してしまうと、より「死」について意識し考察する機会が剥奪されることが危惧される。これが原因となり、「死」を意識する機会が不足してしまっていると考えられる。したがって先に挙げたプロセス1と2は現状から十分であるとは評価できない。

4-2 余命宣告後の行動から見える「自己の死」に対する認識不足と喪失への理解

分析結果における特徴を概観すると、「死」によって引き起こされる喪失について明確なビジョンを持つことが出来ておらず、「自己の死」に対して自覚的になれていない現状を指摘することができる。これはプロセス1として挙げた「自己の死」に対する実感のなさを表している。また、プロセス3として挙げた「死」によって引き起こされる喪失への理解についても現状から不足していることを指摘することができる。

4-3 死の恐怖から見える死に関する理解

分析結果を概観すると、「自己の死」に対する実感が持てていないことを指摘することができ、この結果からプロセス1が十分ではないことを指摘することができる。

4 おわりに

本稿では、死生観構築のための3つのプロセスを十分に経ていないため死生観構築が不十分であると仮説を立て検証した。その結果、プロセス1から3はすべて十分に経られていないことが支持され、仮説によって死生観構築が未熟だと考えるに妥当と結論づけることができる。赤澤・藤田は、死別体験が死生観のすべてを決定するようなものではないと論じている⁴。つまり、今後は保育者養成において死生観構築のための教育実践が必要となるのではないだろうか。幼児に生命尊重を求める現代において、幼児教育を担う保育者の死生観構築に対する教育実践については議論を要する。今後は保育者養成課程において死生観構築実践をするため、より実践内容の精緻化を図り実践における効果測定方法とカリキュラム編成を検討していく必要があるだろう。

<参考文献>

- 1) 安達富美子:日本人の死生観、河野友信・平山正実編、臨床死生学事典、日本評論社、18、2000
- 2) 富松梨花子・稲谷ふみ枝:死生観の世代間研究、久留米大学大学院心理学研究科、久留米大学心理学研究、11、52、2012
- 3) 柿田明梨・原幸一・竹内健児:現代青年の抱く死生観の構造—死に関するエピソード作成の試みを通して—、徳島大学総合科学部、人間科学研究、16、119-120、2008
- 4) 樋口耕一:テキスト型データの計量的分析——2つのアプローチの逡巡と統合、理論と方法、19(1)、101-115、2004
- 5) 山本詩織:A.デーケンによる死への準備教育に関する生涯学習的研究、新潟大学大学院現代社会文化研究科、現代社会文化研究、61、105、2015
- 6) A.デーケン:死への準備教育の意義—生涯教育として捉える、A.デーケン編、死を教える—死への準備教育・第一巻、メヂカルフレンド社、7、1986
- 7) 赤澤正人、藤田綾子:青年期の死生観に関する研究、日本教育心理学会、日本教育心理学会総会発表論文集、49、338、2007

¹ その他の要因として少年期における死生観構築のための教育に問題があることも指摘できるが、本稿では言及せずにのちの検討課題として挙げる。

² 本実践に対する評価や分析を実施する必要があるが、本稿では死生観構築における形成要因について着目するため、それらについては課題として後に詳細を分析し、検討する。

³ 複数回答有の結果を示している